

## 菱刈鉱床見学会

菱刈鉱床は鹿児島県北部の菱刈町に位置する金銀鉱床で、1981年に発見され、現在は、わが国でもっとも多く産する金、1年に約6トンの金を産している。この鉱床は、約100万年前の熱水作用によって形成された鉱脈、言い替えると、今回のシンポジウムで提案された言葉である古地熱系であるが、現在も鉱脈に沿って温泉が湧出しているので、活地熱系との関連が注目されている。

1986年6月16日(月)、古地熱系と活地熱系のシンポジウムの後、マイクロバスで鹿児島大学を出発した見学者25名は南海研らしい多彩な顔触れで、その3分の1は、鉱山や地熱にあまり関係がない分野の人である。宿泊地は菱刈町湯の尾温泉で、この温泉には、菱刈鉱山の坑内からポンプアップされたお湯が供給されている。懇親会は南海研研究小委員会の林満委員長の司会により、住友金属鉱山株式会社の酒井九州男鉱山部長の歓迎の言葉で始まり、参加者から鉱山見学の期待や金鉱石採取の希望などのスピーチがあり、シンポジウムの話題、とくに、沖縄トラフの熱水鉱床を探す方法などについても、グループ討論が繰り返された。

翌17日(火)、鉱山事務所で鉱山長の挨拶のあと、見学者は下着まで替えて、ジープ4台に分乗し、径約4m、傾斜約10度の斜坑に入り、標高265mから、70mまで下がった。冷房車から出た防塵マスクの顔に汗が噴き出す。そのレベルの東40番で、菱刈6脈に着脈したところがあり、暗緑色の凝灰角れき岩の中に、幅約3mの白色の石英氷長石鉱脈があって、北東-南西方向に伸びて急傾斜している。縞模様のところに金が多いという説明が人々を集める。これが熱水でできたものかと感心する人、目では金が見えないので失望した人、有名な金鉱床に触れて満足した人、リュックサックに溢れる鉱石を採った人、など。

再び、事務所会議室で、そのよく整った設備により、ビデオで鉱山概要、続いて、探査関係の方から鉱床発見の経過と調査結果について説明があり、さらに、鹿児島大学理学部早坂祥三教授の司会で、菱刈鉱床を中心に広い分野の質疑応答と意見交換が活発に行なわれた。16日の総合討論の場合と同じように記録の準備をしておく必要があったと、編集者が反省させられる見学会であった。

この見学会で格別の御世話になった関係各位に深謝する。

(編者 記)